采雅

五

和書門
類 一七五四五 號
函 二一六
架 一四
冊 一

24
内閣文庫
和書
類 一七五四五 號
冊 一
函 二一〇
架 八

内閣文庫
番號 和 17545
冊數 1 (1)
函號 210 24

国立公文書館
National Archives of Japan

采雅卷第五

佐源　漢名鶴

内閣文庫

佐るゝ小鳥雅あり〳〵く佐るといふやきゝ鶴乃字を用ゐ

内閣文庫

内閣文庫

浅草文庫

又或ハ佐里鳥なとゝ佐るをせりとゝふるきこゝろ

あるゝハ今俗ゐいふまるかぢるゝをべくまるて

うかばるをばつるとのたいひき大國をば丹頂の
はるを鶴とのたいひてまるづるとば蒼鶴といふを
まるかばるを真鶴といかくい俗なり蒼鶴とかきて
はるとよみ丹頂の鶴をば鶴とかきておほばるを
よむべしつるの中ゆてまがくいたきをばなり

さて庶鶴とかきたるハいろばるとよむべし又
ちろ鶴といふものありをハ大國かいかきたなり
白鶴といふ毛ハ丹頂の鶴の事なれども白ばる
とよみてちろはるをバ全素鶴とかくべきなや
丹頂のはるハ羽もねとしろれとも〇後毛も

黒き吐はるかるべく白くもべく俗小朝鮮づると
いふものなり色をばうるはしくハうち羽鶴とかくべき
なりいうまかもこまづるとすもべしの孫ハばちと
いふものあるを大國よハるきわやそこかとりいふ名を
ちらん項ようづくのあるあるまバ冠鶴とかくべき

やあん

たほとを　漢名鸛

俗よかうばるといふ名ハ鶴に似て河多小ものだ
河鶴といふとい人り式ハかうの名ともいふ又ぞ
かうとのこもいふ雅語なず三代実録小

貞觀十二年二月十二日是日勅彼府去年夏言
大鳥集于兵庫樓上決之卜筮當夏隣兵アラント
とあるハ世俗の云ふも大鳥のねよ事で
おくとしるよ世俗の羽重のおきるごとあるよの
あまバかりはぐるを昔しべおはとといひるる

ぬるうくさまバ鶴とかきてあはとりとよむ
そば　漢名鵲
まさをの栗
ぐびといふとりの又ちとりともいひき
やぐで白色ともかきたまど鶴とかきてぐび
ともおぐとも読ハ　とぐいまは白色とかきて

たゝもつよくてうとゝいふはいとつよきかし 篤信ハ

ぐびハ雲なをぐびの異名ありとて鶴のこと

をるハ誤りくぐびといふかもこれをかけとゝいふごとく

鶴のあくあるこゝろのぐびといふ根あるべかづけ

たゝあるし

かも 漢名鳧 又野鴨

かゝとハたゞぐびをあれどあべてかもといふまれど

一つをうしてかもといふるハ俗のいふまかもの

なり

おほとり　漢名鴻
俗よりよみしるし
中せりかおけもそるとこそもそ

今俗よみしるしといひて雁より似て大きなる
ものなり是をところこし人の鴻と云順が和名抄
に鴻雁とかきて洪岸二音和名加利と加里見
詩文などに鴻雁北地來などかりとバかりとのこと

よむべし望ミ一つを云よとゝよかりまてハおかしき
鵠の和名なるべきや順が和名抄にもくゝひや海鵠
多く先哲くはしく書ともあさりて望之釈日本紀
雄略紀の秘訓の中鵠の注に音可ㇾ読也と志るし
そのうへにもヲホカリとかき里考るに鵠の音ハ
かまびかなくしきをとめまちおとる也志るまハ此翁乃
人のいふことがと心得まバかりことのまゝにまび
きこえりしせしり叔傍にヲホカリと付たるハ鵠
にハ既音可ㇾ読也と記しゝれバ鵠の訓よりも
さりとめかしき事し雄略記をみるに十年秋

九月乙酉朔戊子身狭村主青將吳所獻二鵾到於
筑紫是鵾爲水間君犬所齧死別本云是鵾爲筑紫嶺
懸主泥麻呂犬所齧死由
是水間君恐怖憂愁不能自默獻鴻十隻與養鳥
請以贖罪天皇許焉と可至ハラホカリの訓
と拳一ハ鴻の訓あるが上下略の字の落るも
くゞひる一実鴻をおきく鵠をおほりと云ぎ
このハ中世芝といるおほせるともいひ一ハ方言
なるべし一ばるハらくゝ一まいいそ文字也
雑とんべ一

ほとゝぎす　漢字　呼聲鳥

俗ほうしゝ

夫ぬえ多と云ハ其ハ[illegible]

ばとゝ云　菝草とぬえくさ
とゝ[illegible]

多分ハ中畧して　ぬえこゝ[illegible]

ばとゝ云ハ中畧や[illegible]

妻の未り聚、夜乃初の程ゆゝと二移づく
程と雲く海志くして帰を相と未り移つゝ
まゝ志の帰つゝ波ち〳〵武波竹多の竹の聚こゝ
移宮未相比換る似きまゝかゝ石清水市の恵
今俗当大忠食と云也

萬葉集巻八

鏡女王歌

神奈備乃伊波瀬乃杜之換子鳥痛莫鳴吾戀益
（カミナビノイハセノモリノヨコトリイタクナキソワガコヒマサル）

春山ともるゝて之鶯乃ゝ之鳴き毎ゝ波乃婚
ゆ者ま之どそのゝ之ぶきうまゝ〳〵きゝ多の梨
うゝゝと妻乃かゝ末ゝ者ゝ花ゝ乃ゝ者ゝ未ゝ久
かゝど何ゝ之ゝてゝうゝ〳〵ゝ波ゝ乃ゝ者ゝ乃ゝ之ゝ之ゝ之ゝ波ゝ乃ゝ

同巻

大伴坂上郎女歌

尋常聞者苦寸換子鳥音奈都炊時庭成奴

右一首天平四年三月一日佐保宅作

春霞立流山吹

同集巻九

幸芳野離宮時歌二首 とあるの事

瀧上乃三船山従秋津邊来鳴度者誰換兒鳥

木代ひよりは海は

同集巻十

詠鳥 あるの事

吾瀬子乎莫越山能換子鳥君換憂瀬夜之不深
（ワガセコヲナナゴエヤマノヨブコトリキミヨビカヘセヨノフケヌ）

刀爾
（ニ）

欲も吟多るかまけや

同

春日有羽買之山従猿帆之内敲鳴往成者孰
（カスガナルハガヒノヤマユサホノウチヘタキエクナルハタレ）

換子鳥
（ヨブコトリ）

此吟徒も吟かゝ花りさいつゝで木伏は
あきあ〳〵とんぬ色葉

同

不荅爾勿換動曽換子鳥佐保乃山邊乎上下二
（コタヘメニナヨビドヨミソヨブコドリサホノヤマベヲノボリクダリニ）

此多のゝ色動ゝ云ハうゝとゝかまで我心雀
きんなをのべを里

同

朝霧爾之怒怒爾所活而換子鳥三船山従喧渡

所見

彼未作ゟ居ひんてゝ

同

夏詠鳥

とゝぎす

且霞八重山越而換孤鳥吟八汝来屋戸毋不有

九二

ゝ屋戸ゟ来かしゝ

古今集巻一

丟欲上

題しらず

遠近乃しらゝゝ山中ゝ土ゝ

彼かくしゐのとやりてもれもやらぬ人事なりまほ

なかるゝ河そ

後撰集巻十

恋哥二

人の妻に侍りけるにしのびてかよひけるに

つきもせずうき海にみるめかつゝかり　業平

ひとりのみこゝろをくるしよごと鳴て君はきのこん

後撰集巻十三

恋哥上

公頼朝臣いまかりける女のもとのこま

うけ給はりて　寛湛法師母

おもなくて人を見しよりぬよあて思いつうくとのみ思ひこん

本院にして侍る海よおとのなかるゝ波へ至

後撰集巻十四

恋哥六

亭子院に侍りける人にせうそこつかはし

返事も侍らざりければ

よみ人しらず

うち野にみかしの山のよこ雲よそにみえしをこえさらん

返し　女五のみこ

ふるかしの山にすむともよそにみるわのはしたの人にわかれむ

時にぬれたといへば時河の事もあらし

拾遺集巻十一

恋一

女のもとにたちよりけるにみかはにまかり侍るとて

きすなど侍りて　よみ人しらず

山びこもこたへぬ山のよぶこどりわれひとりのみなきやわたらん

このほとゝぎす

漢名　鳴鳩　或布穀

俗ゝかゝかゝ或ハかゝこゝゝゝ云

啼ごえ世ゝにめでたき名と世界鳩ゝにまさる鶯

と黄色のうぐいすの也時珍曰案毛詩疏義

云鳴鳩大如鳩而帯黄色啼鳴相呼而不相集

とゝゝゝの屋里又云不能為巣多居樹穴及空

鵲巣中哺子朝自上下暮自下上也二月穀
雨后始鳴夏至后乃止と云ふも如何詩の
又俗りかしりかしりこそかどと云も漢俗是説郭に
と云小説参

萬葉集巻三

山部宿祢赤人登春日野作歌一首并短歌

春日乎春日山乃高座之御笠乃山爾
朝不離雲居多奈引容鳥能間無數鳴
雲居奈須心射左欲比其鳥乃片戀耳爾
晝者毛日之盡夜者毛夜之盡立而居而
念曽吾爲流不相兒故荷
高桜之三笠乃山爾鳴鳥之止者継流戀哭爲鴨

同集巻六

悲寧樂故京郷作歌　とのるぶ中

春爾之成者春日山御笠之野邊爾櫻花木
晩窄貌鳥者間無數鳴

同集巻十

詠鳥　とのるぶ

朝井代爾来鳴呆鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴

同

寄鳥　とのるぶ

容鳥之間無數鳴春野之草根之繁戀毛爲鴨

以南ハおほとり

漢名鴻
雅名おほの梁
今俗ぶしくろしと云

古今集には比とめて以なおほせ鳥とよめ
何梁今云ぶしくろし也 雅名ハおほの梁に以南おほ
せも里ハ方言な原のことかの鳥 雁ハ里は
またくこゝの梁て稲をこなよせとも来しまば

かまてのまきばにうまでて稲荷神社とて里へと
こゆるしるし稲負しもるるものとハ賊兵等共
むまふみしをかこそぶらべしこのうちなる世を実
ひらしるひ或を鶯銘或ハ馬ゆとハ(ど)古き寄り
合せ人ものうのそ原史

古今集巻四

秋歌上

題しらず　よみ人しらず

ワの門ふみなれてをとをとはるるハ(よ)ハ訪風にかハきにけり

鴻ハ雁(本ヨリ)

乃こゑもかすかなる所多くの名とあり史

同集巻四

秋歌下

これさだ(ん)この家乃歌合のこと

山田に秋はいかゝとゝ問ばいかゝおもせこそ此頃成り

湯ハ山田小多く集るとゝ也て旦稲はゝ沢

の玄しきよめや苅盧と化ぞ多まとまゝ

ゝとゝ也ぶ仏かゝ刈り住よ立る家なき

ごとくひてかく沢なるんと云ふ

そこゝは

俊ゝ

ゝよ文てん菊おほせ多ゝ共ゝ書れ

ゝ也ゝの沢ゝ多門多ゝ音ゝ仏ゝ家ハ誰も

ゝゝ

菊家四ごゝ仏ゝ豊鶴ゝ

かゝくさつくいとまなくかけはしの山路稲負鳥のうゑ侘たる

是鴻々山田に多く四雁来て稲穂のもとに

乃惣しもまばゆ

是引乃山田のとゐ守のもとに面おかしき

是も右の意也

順ぶ集

里遠み蕎麦の花の白き所に面おかしき岩やまの

是鶺鴒小さの所のもとゝす

水禽考

鶴

唐ゝ云白鶴は今俗小云丹頂鶴也こゝゝ

志賀法師ゝ云は唐の書ゝ見ゝ豊原なし云

鶴黄鶴ハこゝふかしこゝふ黄ばむゆゑ云ハ時珍

ご灰色の花やい色ゝなる原べし蒼鶴ハこゝゝ

云まなびづるなり〳〵虞衡志ニ云所鶴と云
其ハ子ハづるかも丹ずるなりとかゝ
るなり
おゝ鶴ハ卵生也嘉話録ニ丹脈
生ずる一種なりとかゝ
るハ吉しき事也

丹鳥ハ其形白鶴のごとく色ハ赤く頸赤く
足赤しと云るハ何の鶴の事ぞや丹頂とハ足赤
きものゝ名ぞ頂赤きゆゑ名とす
赤しと云る大さ遠里分ゆ白色惟圓と
嘗と見ゆ赤きもの

の沐をつゝ琉球ハ赤足ぎ是浙東
ゝ法ず

唐朝鮮ハ鶴肉をくハず毛ゝや
草ゝ肉をハゝ寸ゝの毛でも血脛骨脆中
砂石等ゝ立治の毛是殺ゝして得ぎや

殺すハ怪ゝ肉をくハゝ重
るゝゝの笑つべし

鶴

ハゝ是をおほゝ理といゝ唐ゝは黑白二
種の毛ゝふハ白色小ゝ羽と裳と黑ゝ

世よりとりの子かなと俗かくづる
ゆえ云為伝ゑびの名をとりなをえびの畧
語として鸛乃和名ゆえ也ゑびは鵠の
和名幼鳴聲よりきれ鵠はえびえび鳴
也中比の語をうまれば次のことは略也

酒

鵠

和名ぐひまたは白鳥唐土は
白黄丹の三種ありをこふは白きを和名抄
小鵠をこうゆえ訓ぎ八尤誤也ぐひと
訓ぎ八可也幼分係をくてとよる也

鴻雁

鴻ハ和名おほとり俗ニ云ヒシクヒ鳥ハ
かりもしかりの類とは雁の音と云なり
乃てもて雁き板ほうは雁のことも今
俗ニかりがねと云ハ誤なり但鳥の一種ハ
ハクチョウ也古ハ鴻白雁ハ古ハ心とかぶる
のなりしかや別貢世事の里新方雁ハ
頸黑く白き毛環の里心とて私の西
なり案

鳧

かもう鴨の一名を「ほうか」ハ語源也野鴨野
鶩などハかゝく也但鳧とかゝ也正しきもの
ハ
黒鳧二種乃内清黒を可食也毒ハ無
鳧也和名かをかも畧して云なるとも云美葉
集にとぐらさをかひかもの子也ハ乃子也
枕草子よかの巣乃子也ハ乃子也是ハ雛を云
赤くハ采
雅こゝへ刺 かるハ友もまく殘里居也
ゑとゝ里ハ赤頭の又ハ名ハ不覚也
すゝかくと鴻かくとハ赤鳧也ゝず

刀鴨とは鴛鴦のまがいなれども芋のべかハ所ゝず
芋のべは鶴也沉鳧ともかきたる事所ハ未見候
沉鳧の二字よりハ羽白鳧の類ゝや
鴛鴦ハいとゞまさかひつまとも云和名抄
よにほと訓ぎしハ誤也にほどりハみほ
ぜ理乃物語水鳥なれ水鳥の古語
也春ハ采雅ゝ志ゝ
ゝめ多ゝ故ゝ唐かは油鴨と
も云ゝ此油を刀剣ゝぬる所利也ゝ
刀鴨とも云也萬葉集江上乃家ゝ鳴鳥とか
家ゝハなく又ほどゝぎすもかゝ

せかの水面の鳥の事かゝ
ゝかいつ也里の事
ゝハ河ゝず
こがもと芋の〳〵ゆゝ田物と世ゝ事ゝ
脫ゝ芋の〳〵とゝ尾長鳥ゝゝ云ゝ〳〵里尾
長鳥ハ小鳥とは別なゝ也ゝ萬葉集ゝお
きゝすもとがゝ乃ゝとゝ詠ゝゝゝゝゝゝゝゝ芋
ハ古き名なゝ
ゝのゝかもゝゝゝゝ河ゝ今俗ゝゝゝゝゝゝゝ云ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て異をとくつ分也

海雀

さて可

鷺

見どきぐ也見ぐ陸さぐ器語なる

紅鶴

紅鶴をつきゝ者原ハ川ゆ一鶏鶴乃附録

名旋目ゝ梨つぎう可屋里

方目

一

小さもゝ鶏鶴乃類也庵よはなきうゝや見ぐ

ちゐなる

小さき黒鳥なりと云ふ話也黒色

玉伊乃海亀之味ひ有なハ多有

五位鷺

鷺も泳ぐハ木の上なるなど常ハ水り遊ぶ

此さまは水りの事ゆえ木所ゆ有

事へこのまぎれ名ぞくれ乃五位小叙さ地

ゆえハいた温なるハうるぢいなき故必大

萬信等信ぢ云事大さ笑つ便し

又すごしぢ又ぢこしなど云ハ甚ちなる物

ぼむなり鷺ハハかまくさぐ背黒きはごゐ
ぎぬ黄也是ハかハ是ゞ鳥の種也さ侍ど格
別ゝくさぐ見まるふよて俗ク是この名有の
鶏鶴は是ゝはあらぶいまの作こしよ是わ説
な青雑と云ものゝ是小ぐんの類也

鵲

志中川多ゝは鵲乃冠語正名はうも志鳥
ゝは鷺乃事也是を鵲と誤里しは古ゞく
志鳥すむうなゝ象ゝこの歌うの一言ゝ
の年ゝ紀ハ詩ゝ紀也是は鵲ゝ云ハみ

の海と云ごとく大きなるといへども尤て大鳥
なるとは考へ難し雄略紀を引て此時
本邦既知使鸕鷀捕魚也とかき紀神武
紀をば見ぬや有べきも
とゝ

鷺信ゞ鷺鷥より大也一類別種也と云る
八時珍ゞ其形大子鷺鷥而色多紫赤
好遊故謂之紫鷺鷥也と云るより押
て云るゝ又鵠頸如雁と云るハ反月毛を
まのあたりんにあらんや但し反月ハ雄と

毛冠等を脱ぬを

奥物

ゑぶとは物はかまの帷子よりあるを

俗りかと世ゝ又セゝゐむとも云なるを

八尺ませゝゐむと云ゐはかまごゝ多也皆紅

也或ハ碧紫と書紫とも多ハ尺況是とも

尺ごしゐと云

うやぐまき

今俗ゝのやゝぐまと云小鳥也

志ざし

肉臭味不美衣草ノ鶴ニアヘリ　ヤ云ふハんゑ

ろや　手草さる事ともいふべきさまは古

今賞翫乃ゝ元也但し鶴ハ三ツなるやゝ

ゝ唯田鳥の二字のやゝこのなごりは志ず

かも免

かま免とも古くゝ屋里都鳥とは方言なる

伊勢物語ゝ事也大ゝきやかゝ事は川乃大き

ゝ鳥ば鳥の小さゝ凡事なるとゝひ学ぶ也志字

がきゝゝゝ人やこゝぶ紀ホ鷗と用ゝ志の色黑と

よゝゝゝ次西土ホて背の黑き鳥をゝやこゝる

とりなどは語の又の方言なるべし

鶩

此國にはなき鳥也古事記にあとり

共梨と鳥は鴻鷺也鷺鷺八ツ所こそ

ゆいまの角のなりぬべし高麗國

雄

雄なる文采なり頭紅なるべし且白長毛也

かいつむり

時珍の本草に鸊鷉刀鴨因名也鳧八鶩也

菱芡ゟ鸕鷀水鳥也大如鳩鴨脚連尾不
能陸行常在水中人至即沉或撃之
便起其膏塗刀劔不鏽續英華詩云
馬嘶苜蓿葉劔塗鸕鷀膏是也ゆへに
この毛を煎ぜの清ば膏の主治ゝ滴耳治
聾とゆるゝ菱芡ゟ説なり是鸕鷀の膏
なるとまるべし
をがも　俗こがもゆ云
時珍ゟ説ゆゝは刀鴨油鴨等ゝ名を
ゆゝゆゝ清ゆ是ゝこの毛どもゝゝこのなゝ

性小亀の二字を用ふるかゝるべ

あるべ　俗ともいふと云　又かこびるとも云

爾雅鶡沉鳧也（是古人時陵が説の）鳧性好没故也

右ハ本草鳧乃釈名ニ見ル而の文也

此書ハ考おもふ原也但し貝原篤信が

はくるかゝ大和本草の誤ると正しおし

まものもとゝ小草稿と見て考事

とこゝ[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan